第319号　昭和47年1月10日発行（毎月10日発行）
定価一部 100円

昭和47年（1972年）
1月号（No. 319）
社団法人 日本山岳会
（J. A. C.）

目　次

本文
昭和46年度年次晩餐会……1
三田会長あいさつ……1
新名誉会員紹介……1
新永年会員紹介……1
同時登攀の確保について……2
故深田氏の墓参り……5
冬山登山技術講習会報告……6
静岡支部の紅葉会に出席……6
1971年のヒマラヤ
ダウラギリ5……3
アンナプルナ2……3
ブタヒウンチュリ……3
ガンガプルナ試登……3
海外通信
ブエノスアイレスから……4
ポカラより……4
バルン氷河より……4
ハヌマンテイバ……4
アンデスへ……4
図書紹介
ネパール・ヒマラヤ……8
白頭山天地……8
図書室便り
新刊図書受入報告……9
図書委員会報告……9
会務報告
12月理事評議員会……10
年次晩餐会出席者……10
会員異動……10
ルーム日誌……10

昭和四十六年度年次晩餐会

昭和四十六年度年次晩餐会は十二月四日午後六時から平河町マツヤサロンで行なわれた。ことしは例年になく出席者が多く、またこれまでも多数の会員から要望があったので、恒例のテーブルに着席する方法をやめ、立食パーティにした。

「この一本展」はこの三月亡くなられた故深田久弥氏の著作、遺品を展示し、特売コーナーではルームで販売している「日本山嶽志」「日高山脈」など発売、また特設バーも設け、定刻前から多数会員が集まり、ロビーで話の花が咲いた。

来賓として深田志げ子、同森太郎両氏および来日中の韓国山岳会孫慶錫氏を招待、定刻六時板倉理事の司会によって開会、まず藤島敏男名誉会員の音頭で乾杯、三田会長から名誉会員として田中薫、岩水信雄の両氏、永年会員として粟飯原健三氏を紹介、粟飯原氏に銀巻きの本会バッジが贈られた。三氏からそれぞれあいさつがあってから三田会長の会の現況報告（別項）が行なわれた。

このころから立食パーティのためあちらでもこちらでも楽しそうな話し声が高まり、例年の通り、何人かの珍しい会員にひとロスピーチをお願いしようとも思ったが中止し、財務担当の中屋常務理事が、大声をはりあげて「会でいま一番の問題は会費未納者の多いことで、きょうこの席に出ている人のうちでも一割が会費を払っていない人がいる。名前も全部わかっていてそのブラックリストも持ってきているが、その人の名誉のためあえて発表はしない。よろしく御配慮願いたい」と訴え拍手を浴びた。

立食パーティなので流れ解散となり八時すぎこの楽しいパーティもお開きとなった。

なお、当日の出席者全員には七二年度版山日記、新会員名簿、深田久弥展目録をお渡しした。また相変らず無断欠席者が多く、ことしは十九人もあった。無断欠席された方は本会ルームあて当日の会費二千六百円をお送り下されば幸いです。（山崎）

（出席者名は十ページ参照）

三田会長あいさつ（要旨）

会の現況について簡単に報告する。四十六年十一月現在の在籍会員数は三一三八名で、内わけは、新入会員一五八名、復活会員七名、物故会員十一名、退会者八名、本年度除籍者七八名（これは五年間会費未納者）で物故会員は手塚英信、金禧変、袋一平、神谷真吾、家田千尋、岩崎京二郎、野田五郎、千々岩玄、入沢文明、高木邦夫、大島堅造の十一氏で、ここに故人の冥福をお祈りして黙祷したい。

叙勲者は早川種三（勲二等瑞宝章）村田数之亮（勲三等瑞宝章）故入沢文明（勲四等旭日小綬章）の三氏でこれは現在会でわかっている方だけである。また日高信六郎名誉会員は多年にわたる日ネ親善に対する功績によりネパール文化勲章が授賞された。

ことしの海外登山も一段と盛んで、本年度ネパール・ヒマラヤへはいった隊だけでもプレモンスーン十一隊、ポストモンスーン四隊。またその他国外の山へ多数の隊が出かけ、その中で本会々員もそれぞれ活躍したが、何人かの遭難者が出たことはまことに残念である。

会としてこの当面の仕事は上高地山岳研究所の増改築で、目下資金面、官庁関係への手続きなど準備を進めており見通しはまだ立っていないが、明春にはメドがつくと思うので、春ごろから本格的な会員募金を行ないたい。またそのときは会員各位の絶大な御支援をお願いする。

会費納入率は現在五十二パーセントなので、これを何とかもっと増やしたい。明年二月郵便料が値上げになるが会費の納入率が増えれば会費の値上げをしないでもすむかも知れないので、この点も会員各位の御協力を得たい。本日は十分楽しくすごしていただきたい。

新名誉会員紹介

田中　薫氏　（一九一六年九月入会、会員番号四四四番）明治三十一年六月十一日生れ。大正十一年三月槍ケ岳積雪期初登頂。神戸商大山岳部長として北アルプス、台湾の山などに登る。一九五八年神戸大学パタゴニア探検隊長、登山関係の主な著書、登山、台湾の山、氷河の山旅、大氷河を行く。昭和四十一年十一月本会永年会員。

岩永信雄氏　（一九一八年九月入会、会員番号六二八番）明治二十八年八月生れ、五高、東大時代から北アルプスの山々を登り、冠松次郎、沼井鉄太郎、別宮貞雄氏らと主として黒部渓谷を開拓、大正十四年八月黒部下ノ廊下完全遡行、大正十五年八月小又川から奥大日岳登頂、その他積雪期の東北朝日連峰の開拓者として知られる。昭和四十三年十一月本会永年会員。

新永年会員紹介

粟飯原健三氏　（一九二一年九月入会、会員番号七九二番）明治三十年十二月一日京都市に生れる。大正六年大阪高商（現大阪市大）に在学中友人三名と計り山岳クラブ（現大阪市大山岳部）を組織しまず大正七年烏帽子・槍縦走、爾後近畿地方の山行。大正九年信州妙高にて一本杖の奥式スキーを習い山スキーに執着。

加納一郎氏監修の「山とスキー」の大正十一年十月号にかの生として書かれた小さい記事が「ノルウェーと私の出合い」。同国に山とスキーのペンパルを得て文通。昭和四十一、四十五年に招かれて夫々数ヵ月間の国内旅行。大阪市大学山岳会々長。

山岳創刊号覆刻

「山岳」第一年第一号を三百部限定で覆刻します。頒価千八百円（送料二百円）希望者は代金をそえ至急ルームへ申し込み下さい。二月上旬出来る予定。二、三号も出す予定です。

同時登攀の確保について

松永敏郎

一九七〇年の夏、会員のグリフィス・ウェイ氏の好意で、しばらくの間シアトルに滞在して付近の山歩きを楽しんだ折、同市にあるMOUNTAIN・SAFETY・RESEARCHのラリー・ペンバシイ氏を尋ねる機会を得た。

ペンバシイ氏は、シアトルのマウテニアーズの役員でもあり、登山用具の改良には非常に熱心で、いろいろ面白い用具を見せてもらったが、私が訪問した数日前に、エーシルリットの社長がここを訪れたということで、ヨーロッパでは新しい確保法でこういう用具が既に使われているそうだと、見せてくれたのは小さな楕円形の鉄鎖の一つであった。

これを安全ベルトについて制動確保を実験してみると、他に確保支点をおかずに、普通に腰を据えた姿勢でも、約五五〇キロの荷重に十分堪えられることがわかった。この実験は、後から考えてみると大分お粗末な設定だったので余り意味がないが、帰った後に、この方法で同時登攀（コンテュニアス・クライミング）の際の墜滑落に対する確保ができるのではないかと考えてみた。

御承知のように、昨年あたりから、この確保法（STICHT-SICHERUNG）が日本にも紹介され、岩壁登攀の際のダイナミック・ビレイに小さな用具のいくつかが利用されて、非常に効果的だといわれているが、こと、コンテュニアスで登る時の確保法は、新しいものは発表されていず、旧態依然のようでもあり、私自身のテスト回数もまだ十分とはいえないながら、雪上での確保に関する限りは従来のものより大分有効だと思うので、簡単に解説させていただく。

この春来日した折、わざわざ尋ねてくれたペンバシイ氏にこのテストの結果を話した所、とんでもないという顔付きで、「そんなことしたらたちまちあの世行きだ」といっていた。それからみると、まだ、ヨーロッパやアメリカでも使っていないのであろうか。

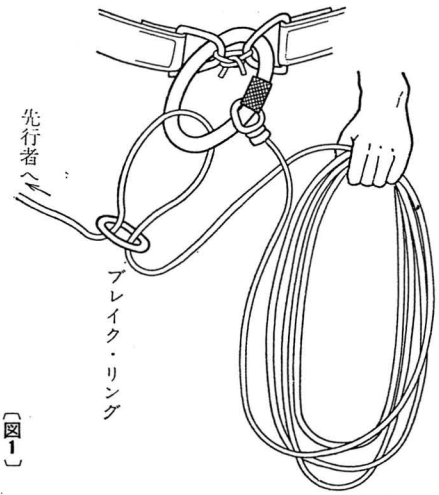
さて、従来の同時登攀時の確保は、アンザイレンした先行者が滑落すると同時に、後続者は自分が手に持っているザイルのループにピッケルを通してピッケルを雪面に突き刺し、それを支点にして、ザイルとピッケルのシャフト、またはザイル相互の摩擦を利用した一種の制動確保を行っているのが普通であるが、実際には動作を適確に行いにくく、特に、ザイルを谷側に持ったトラバースや下降時の確保は、確保動作のために体を反転させねばならぬ場合が出るので、時間的に後れを生じ易くて失敗する率が高く、確保技術の中では非常に難しいものだと言えると思う。

私案の確保法は単純な鉄環（ブレイク・リングと仮称）を利用するだけの比較的簡単なものである。

セーフティーベルトのカラビーナを通るザイルを、図1のように、いま一度ブレイク・リングに通し、一方はアクティブ・ロープとして先行者に続き一方は、従来のようにループにして持つのが基本型になる。ブレイク・リングを使わぬ場合と較べて、先行者との距離に応じて行うザイル操作に多少のわずらわしさがあるのが欠点であるが要は、図のように、リングが遊んでいる状態で行えばよいと思う。

使用したリングは、太さ約六ミリの鋼鉄棒を内経三・五センチの正円形にして溶接したもので、八〇〇キログラムの引張りに堪えられるように作ったものであるが、一一ミリのザイルが二本入っても、そのままではスムーズに動かすことができる。

確保に必要な制動力は、滑落によってアクティブロープが引張られ或る距離を走るが、ザイルの緊張に応じてリングがカラビーナに接近して来る（図2㋑）。その間を通るザイルには、カラビーナとブレイク・リング両者との摩擦が除々に増加して滑落によって生じた力を吸収し、やがては、（図2㋺）のように、ザイルを締めあげるような状態になって滑落者を停止させることができる。



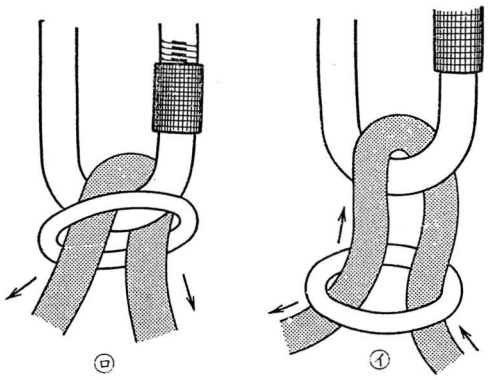
〔図1〕

実際に雪上でテストをしてみると、滑落によって生じる力とザイルの辷りの距離は、相対的に、弱ければ短く、強ければ長くする必要のあることが実感できた。

どのような場合でも、ループを持った手をそのまま握りしめると、ザイルの辷る距離は極端に短く、滑落のショックを吸収できずに、確保者自身が転倒させられる例が多かったが、これでは当然、この確保法の意味をなさない。

制動の要領は、滑落と同時に、保持したループを二つか三つ手から離して制動用のザイルとして自由に、むしろ最初は手から送り出してやるくらいでよい。制動に要するザイルの長さは、二mから五m程で、除々にかかる制動力でほとんどの滑落を停止させることができ、しかも、馴れれば強いショックをほとんど感じないようになった。

急傾斜の氷雪上でのテストをする機会がなかったが、アイゼンを着用して足元が安定している場合は、ピッケルの助けをかりずに直立したまま、膝と腰の弾力を利用して容易に止められるくらいであった。もっとも、実際の場合には、ピッケルを利用して三点支持の耐風姿勢に似た形をとり、できる限り安全を期することが当然である。



〔図2〕

三人パーティーのトップ・セカンドが同時に滑落した時のラストの確保や、先行者がクレバスに墜落した時のように、ショックが非常に強いと思われる場合の確保は、保持するループを全部放り出して（特に、ザイル自体がからまることがないように）ショックそのものに耐える姿勢をとる方がよいように思われる。ザイルは握っている必要はない。

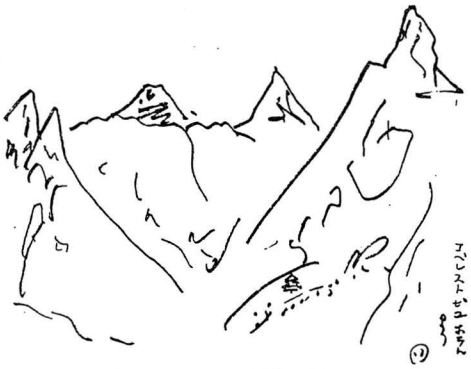
行動中、ザイルの操作がスムーズに行えるように心がけるのは当然であるが、ループの持ち方を間違えたり、ザイル自体のキンクで途中に瘤ができると、その部分で流れがとまり、強烈なショックで確保者がはねとばされることになりかねないので注意を要する。

トップの場合、ループ数が少いが、同様にリングを使用し、万一、後続者が滑落したときは、ザイルから手を離し、耐風姿勢か滑落停止の姿勢をとるのがよいと思う。

この確保の場合も、他の確保と同様に、滑落によって生じる力の方向が問題になるが、それに対抗して確保の姿勢を取る時間的な余裕は、従来のものより多い。支点が腰の前部にあって位置が低いので、スタンスがしっかりしていれば、落着いた操作で従来のものより一層効果的な確保ができようと思う。

現在までのテストの回数も少なくそれも、私自身の恣意的なもので、まだ多くの問題点があると思う。お試しいただいて、御意見をお聞かせ願えれば幸甚である。

× × ×



エベレスト……川喜田壮太郎氏筆

一九七一年の・ヒマラヤ

A・プレモンスーン

七、ダウラギリV（七六一八m）

——試登——

県陵山岳会（長野県）

隊員、矢崎源市（隊長、35）、手塚英信（30）、柳沢利文（27）、飯村富彦（26）、前島孝夫（26）、青木憲一（24）、甕関次郎（22）、寺畑哲朗（37）。

活動状況、ダッカの異変で入山が遅れたが、五月四日にポカラ着。マヤンディ・コーラの上流にBC（四八、四七〇〇m）。五三〇〇mにCをつくったらしいが、五月四日、青木、手塚、柳沢の三名が七四〇〇mの地点からアンザイレンのまま滑落、行方不明となる。その他の詳報は未入手である。

八、アンナプルナII（七九三七m）

——試登——

信州大学登山隊については本誌三一四号に既報、佐藤正敏（22）隊員の遭難についてもそれを参照のこと。

九、プタヒウンチュリ試登（七二四六m）

蔵王山岳会

隊員、大石豊見（隊長34）、小松秀悦（26）、伴正一（24）、萱場重雄（23）、加藤千代（27、現地参加の由）。

活動状況、本誌前号に紹介した東大チューレン・ヒマール隊と同じく、カベ・コーラの西股に入り、チューレンとのコル付近（南側五六〇〇m）にC3（五月三日）を設けたが、天候不良その他の理由で下山。日本から出る時に手続き上に不備あり、大石隊長には電話で連絡せるも遂に報告得られず、誠に残念である。

一〇、ガンガプルナ試登（七四五五m）

八王子ヒマラヤ登山隊

隊員、三好勝彦（隊長、28）、広島三朗（副隊長、28）、間庭秀紀（31）、小俣武男（27）、石井奉明（26）、八ッ橋輝海（26）、田口耕一（28）。

始めに広島君から吉沢宛（3 29付）の連絡を紹介しておく。

× × ×

前略、一人遅れて三月四日に羽田を出ましたが、東パキスタンのダッカの紛争で八日足留めを食ってしまい、一二日、ロイヤル・ネパールの救援機で東大の鹿野君と二人、他の日本隊より一足早く、カトマンズに飛びました。

一七日に、待っていてくれた隊員一名、シェルパ一名、それにポーター二名の計五名という気楽なキャラバンをポカラから始め、七日で最奥のマナンに着きました。

風俗は全くチベット風で、風もチベットから吹いてくるような気がします。マナンは標高三六〇〇m、これまで登山隊はおろか、学術調査隊もあまり来ていないところなので非常に興味があります。

民度は極めて悪いところと聞いていましたが、本隊は一週間マナンに滞在し、大変楽しくやっていたそうです。

小生も四泊しましたが村人は好意的でした。ただわれわれのガンガプルナ登山の許可について、四月に入ってから一二人の委員会でその可否を審議するとのことでした。

現在、ガンガプルナ北面の仮称ガンガプルナ氷河の標高五〇〇〇m地点にBCを建設中で、四六〇〇mの仮BCにおります。ここは前記の氷河の側堆石上で極めて気持ちの良いところです

五〇〇〇mのBCからはわれわれの登攀ルートが殆んど視界に入りますが氷河上なので一寸ばかり寒いのが難点です。

仮BCからはマナスル三山がはっきり望まれます。また、ティリツォ峰、アンナ峰がみえます。

これから約五〇日の予定での登山ですが、BCから頂上まで非常に急な斜面なのでじっくりやります。

テントは四つ位だして頂上に立つつもりです。隊員七名全員元気で、リエゾンのシェレスタ氏も良くやってくれています。

× × ×

〔その後、登山隊本部宛への手紙をその本部から送ってきたが、それは次のように、本当のサワリのところだけしか書いてない〕

残念ながら登頂出来ずにカトマンズへ戻って来ました。

C2からC3までが極めて悪いルートで、フィックスのべた張り。C3は六七五〇mに置き七〇五〇mの小ピークから、これも極度に悪いルートで、距離にして四〇〇mぐらいのところにACを設けましたが、小ピークから一日間を要しました。

ACからは一度一〇〇mぐらいの下りがあって、その先は鋸の歯のようなリッジが三〇〇mほどあり、そこからガンガの頂上へリッジが続いています。しかしACからはこれも悪いルートで約一五〇mのルートを伸ばしただけでフィックスも足らなくなり、加えて悪天候のために、ついに五月一三日断念し撤収をしました。

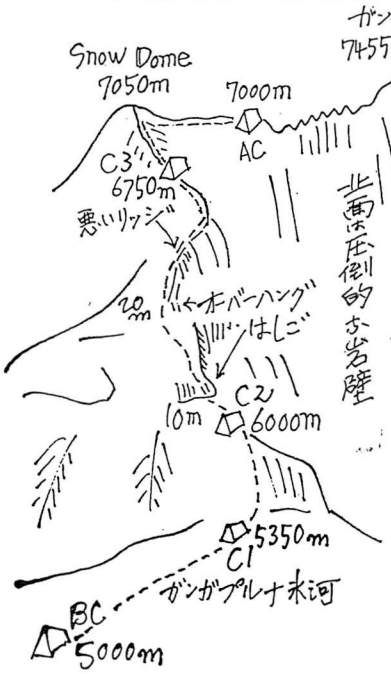
（中略）

また悪天候は六〇〇〇～七〇〇〇mくらいの間で、その上は良い天気だったと思います。ACでは薄日が差しながら一日で七〇cmも積雪がありました（五月一二日）。

また、シェルパは正式なのを四名、低所で使えるもの二名（うちメール、ラナー一名）傭いましたが、一名途中で帰ってしまい、結局三名で登りましたが、そのうち一名は元気だけは良いのですが、カッティングも知らない者で、あとの二名はC3までしか登らずACを建設は全部隊員だけでやりました。それでもわれわれのシェルパはいい方らしく、他の隊はもっとひどかったそうです。

（後略）

僕はこのあと西パキスタンへ行ってカラコルムの麓を四〇日ほど歩きたいと思います。



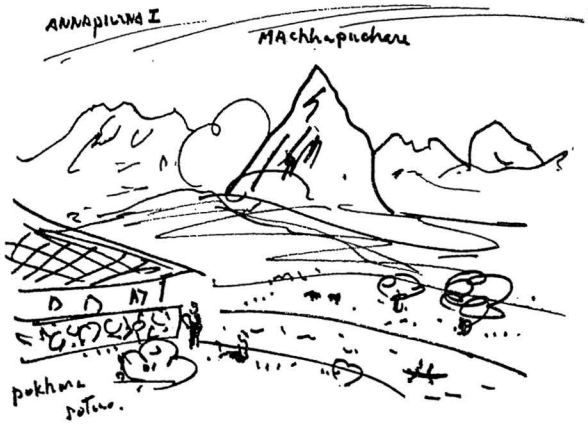
ガンガプルナ試登ルート図

◇バルセロナから◇

素晴しい「世界山岳事典」頂きました。沖允人という人が商用で来てついでにカタラナ山岳連盟の会でネパールの話しをし、美しい映画を見せてくれました。貴殿ももう一度スペインに来て私の家に泊っていって下さい。一緒に山に登りたいと思います。

四月からスペイン山岳連盟の海外登山部長に指名されました。八～九月にケニア山で新ルート開拓、キリマンジャロにも登ってきました。七三年にはネパールへ行く予定です。

（吉沢宛、12 9、J・アングラーダ）



川喜田壮太郎氏筆

ポカラより

神谷　恭

遂にエベレスト・ビュー・ホテルへ行って参りました。八十一歳は日本人では私が記録とのことです。

帰えり路、ガートでテンジン君に邂逅、再会を悦びました。日高さんはルクラで落馬され、大したことはありませんがカトマンズに引返えされたのは残念でした。幸い好天に恵まれ、充分満足いたしました。今日はポカラでこの写真（牧野君写す）の通りの眺望を楽しみながら静養しております。（吉沢宛、11・24付）

バルン氷河より

小浜浩三
今井幹雄

ご無沙汰しております。BC以後の状況をご報告いたします。

9・21、バルンとチャゴ氷河の合流点上五三〇〇mにC1、9・24、チャゴ氷河の中間、五八三〇mにC2を作り、9・28までC3予定地に荷を上げC3建設寸前のところで三日間、一・五mの雪に見舞われました。

ラジオによるとカトマンズも七〇数年振りの大雨（この時期としては）ということで、各キャンプ間のラッセルなどでC3建設が遅れ、本10・8になりました。場所はチャゴとマカルー2のコルで、六五三〇mです。

これから上の西尾根は部分的に雪のついた岩稜でかなりのフィックスを要すると思われます。約七〇〇〇mにC4（最終）を設け、10・15までに登頂したいと考えております。

10・3以後は天候が回復して、毎日晴天が続いております。帰えりはジュンベシ経由（一部はナムチェも経由）で直接カトマンズに向う予定です。以上ご報告まで。全員元気でおります。

千葉大学学術調査登山隊
（吉沢宛、10・8付）

●海外通信●

ブエノス・アイレスから

植村直巳

ブエノスに来て二週間目、昨日やっと南極行きの正式の許可を海軍省からとりました。

一二月中旬から一月末頃までの予定ですが、まだはっきりした日程はわかりません。

予定地は南極のウェッデル海の氷棚の上にあるアルゼンチン南極ベルグラーノ基地です。南極横断の可能性をつかみ出してきたいと思っております。

こちら日本と反対に今盛夏に入り、三〇度以上の暑い日が続きます。南極行きにご協力ありがとうございました。

（吉沢宛、11・18付）

長山協関係慰霊祭

謹啓　去る十月十六日、遙かなヒマラヤ、ガンガブルナ峰におきまして、不慮の遭難に散りました。

故シェルパ頭　ギルミ・ドルジェ
シェルパ　ペンバ・ノルブ
シェルパ　アン・ペマ
シェルパ　アン・ギャルゼン
シェルパ　ナワン・チョタレ
隊員　小木曾　巌（二九）
隊員　笹川　広平（二五）
隊員　箱山　益雄（二二）

の勇敢であった人々の霊の冥福を祈り善光寺御上人のご臨席を得て合同慰霊祭を、左記によって厳粛にとりおこないます。

ご多忙の折、まことに恐縮でございますがご出席をたまわりますようお願い申し上げます。

昭和四十六十一月二十日
長野県山岳協会長
小沢利一郎

記

日時　11月28日（日）午前11時から
場所　長野市　善光寺本堂

ハヌマン・ティバ峰

無宗楽生会

初冬の候、皆様方には益々御健勝の事とお察し致します。

さて私達無宗楽生会・パンジャブヒマラヤ登山隊は、皆様方の激励を受けて、去る八月十五日羽田より空路インドへと出発いたしました。

ニューデリーよりバタンコット、マンディを経てマナリへ入りましたが諸事情により第一目標であったデビナラ山域への入山は中止せざるを得なくなり、マナリよりバルチャンを経て、ソーラン谷の奥、ビアスクンドに入山致しました。

未登のシャカルベ（六二〇〇m）を目指したのでしたが、悪天続きと予想外の困難そうな大きな山でその上奥深い山とあって、日程不足もあり、シャカルベはあきらめました。

ソーランバスを前進ベースとしてハヌマンティバを北稜とノーマルルートから同時にアタックし、それぞれ登頂に成功いたしました。北稜はラッシュにより三ビバークの末勝ち取った第二登の記録となりました。またチョタビークの南稜の試登も行い、多くの経験を得て九月末デリーに戻りました。その後隊員各々自由行動で各地をまわり三隊員を除いて十一月を最後に全員無事帰国いたしました。

遅ればせながら書面をもってお知らせ致します。

（吉沢宛、11月）

アンデスへ

土　隆一

拝啓　秋深まる折、日々御健勝のこととお慶び申しあげます。

さて、今月二十日から二ヵ月半、文部省科学研究費による第二次静岡大学アンデス学術調査として、コロンビアをはじめとする南米諸国に出張することになりました。今回の調査にあたっては、第一次のときと同様、皆様から御声援頂き、おかげ様で準備も万端整うこととなりました。

なお、静岡新聞・静岡放送をはじめ県内各方面からも御援助を頂きました。ここに出発にあたりご挨拶申しあげると共に厚く御礼申しあげます。

敬具

静岡大学理学部地学教室

第二次アンデス学術調査隊

（吉沢宛11・10付）

『ユーゴースラビア隊のイストル・オ・ナール新登頂の問題』

ユーゴー隊がイストル・オ・ナール峰（七四〇三m）に新ルートを開拓したことは、本誌にも「岩と雪」23号にも発表しておいたが、これについてノシャックを試登した松商短大の樫原正勝君から、怪しいという意見が寄せられて来たので、それをそのままご紹介しておく。

× × ×

一、ユーゴー隊参加のリエゾンがチトラルでわが隊のリエゾンに「登っていない」と語った。

二、シャグラムのハイポーター（ユーゴー隊に参加）が、攻撃隊員二人が高山病に罹り彼らの手で救出されたことを語った。

三、HPたちも登頂していないと語ってくれた。

四、ユーゴー隊の隊長にチトラル・ホテルでお逢いした時、「おめでとう」を言ったが、「顔をそむけ、お茶を濁したような態度」をとった。

◇

これは相当根拠のありそうな重要な発言であるが、だからと言って今直ぐにここで彼らの登頂を否定してしまうことは早計である。

こういうことはいずれヨーロッパの方からわかってくると思うので、われわれは暫らく静観していた方がいいように思う。殊にバリック隊長からは、いずれ写真が私のところに送られてくる筈になっているから、結論はそのあとで出しても遅くはない。（吉沢）

× × ×

故深田久彌氏の墓参り

フュアロ・スクリベンダイ（執筆狂）は登山家の宿命だとママリーは言っているが、それを地でいったわれわれの仲間、深田君が逝って（三月二一日）から、もう九ヵ月の月日が経っている。最早とも思うしまた私にはなんだかずっと昔のことのようにも考えられるのである。

われわれはヒンズー・クシュ会議が十一月十四、十五日と福井県の芦原町で開かれるのを機会に、お隣りの県の大聖寺市は本光寺の墓地にねむっている深田君を訪ねた。その前日の十三日のことである。

志げ子未亡人も来られ皆で一緒に丘の上にある本光寺の山門をくぐる。お墓はそこから五〇mばかり先の斜面の半ばにあった。高い樹の間を洩れる陽光は射すが、世間の音は何も聞えて来ない静かなところであった。深田君の安住の地としては誠に相応しいと思う。

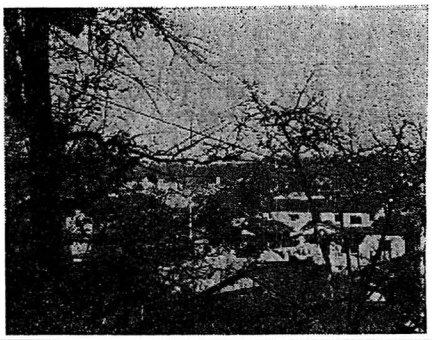
寺からご生家はそう離れていない。深田君が幼年時代を過した家、そして部屋。お姉さんが何と深田君に似ておられたことか。

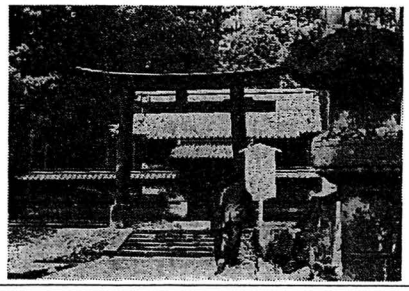
関係の深い何人かの方も同席されて録音の再生や写真帖の説明、思い出話などをそれからそれへとして下さった。この地で作られた追悼文集も出来上ったばかりのを頂いた。

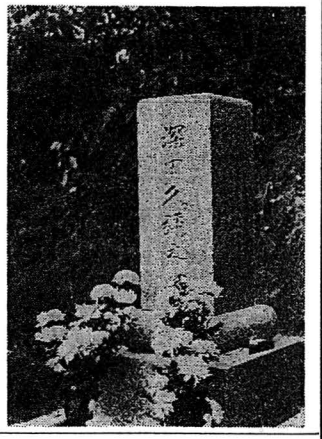
明日からの会議の準備もあるので、時を見はからって辞去したが、故郷があり、昔のことをいつまでも語ってくれる幼ななじみが幾たりもいた深田君は死んでもなお且幸福な人と言えるのではないだろうか。

あとから例によって額の汗をふきながらやってきた福岡の新貝君の一行は深田君のま新らしい墓石の上から、ジョニクロを全部流してあげたという評さである。嘘か本当かは知らないが、兎に角いいことを思いついたと感謝している。

（吉沢）







●右は本光寺にある深田君の墓。
●中央は本光寺の山門。
●左は山門から深田君の町を望む。

◇第三回日本ヒンズー・クシュ会議◇

日本ヒンズー・クシュ会議もいよいよ第三回目が行なわれた。場所は福井県の芦泉荘。日時は昭和46年11月14と15日。集まるもの一四一人。

これで大体定着したように思うが、それだけではダメで、今後いろいろとそのやり方というか内容について考えていかなければならない点があるものと思う。今回から順次カラコルムの方も研究範囲に入れようと田中栄蔵氏を中心に着々資料整備にはげんでいる。

今年は特別講師として四谷竜胤氏を頼み、「山と人間」という題で、彼に言わせれば漫談をやってもらった。

文字通り口角泡を飛ばす（歯が出ているから）熱弁とその人間味、矢張りこういう人は山岳界の宝の一つとして大事にしておくべきである。（吉沢）

◇ゲレース・ホーマンの遭難◇

（ダウラギリで死んだヴィン・ホーマンの妻）

グレース・ホーマン（博士）が、一九七一年四月にアラスカで死んだ。彼女と二人の友人、ハンス・ファン・デル・ラーンとジョン・サミュエルソンが、エクルトナ氷河を遡っていった。しかし荒天が彼女らを山小屋に閉じ込め、二日後もと来たルートを引返えした。不幸にもそのルートには深雪が被さっていた。ある斜面を下っていた時小さなナダレが発生し、これに埋まってしまったのである。一番上にいたサミュエルソンだけはどうにか助かったが、他の二人は硬雪の下になったのでどうにも手の下しようがなかった。

グレースはワシントン州の生れであったが、幼ない時にオランダに移り、ベルリーグとユトレヒトの大学を卒業し、（大戦中はここにいた）その後、イエール大学で麻酔学を学んだ。グレース・ジャンセンとして彼女は二人の娘の母親であったが、この二人はもう成人している。

彼女は後、アラスカのアンカリッジに移って活動したが、熱烈な登山を縁に一九六六年、ヴィン・ホーマンと結婚した。

一九六九年、ヴィンはダウラギリで死んでしまったが、短かい、幸福な結びつきの間にも、彼は彼女を自分の夢しい計画の中へ引張り込んでいた。ヴィンの三つの本や海外への情報送りにも熱心に協力した。アラスカの登山界の活動情報は彼女に負うところが多かった。

登山活動の主なものとしては、マッキンリー登山隊長となったり、他の有名な登山がある。初登頂はハーディ・ガーディ、キンボール、バーマー、六二二〇峰ウィッカーシャムなど。これらの中には単独のもある。

グレース・ホーマンは現代の指導的女性登山の一人であったが、その登山家としての真価は次第にわかってくることと思う。ともに死んだハーンと二人は、アラスカ山岳会の第一線に立つ存在でもあった。

（I・Y）

☆アフター・カミング☆

蒲池邦太

寒い日が毎日続いていることと思います。お元気ですか。夢が何とかやっと現実のレールを走り出しました。でも大変なのはこれからだと思います。

神戸を11月2日に出港した船旅はホノルルまでかなり遙れ、一日遅れの12日の朝つきました。ホノルルでは横地さんの紹介で栗原さんに案内されました。船の中には芝浦工大生が他に二人もいてびっくりしましたが、仲間になりました。

ロスには19日の早朝につきました。そして税関から英語の世界。

「これは私の私有物だけ」

「私は日本、アンデス登山」

「たった一人か」

「私、アドバンス」

「どこへ」

「ベルー、ゼ・アザー・メンバース・アフター・カミング」

「オー・ケー」

「サン・キュー」

（注・どこかで聞いたような英語が入っている）

とこんな調子でしたが、相手が喋べっているうちわかった一つの単語ですべてを想像して答えました。しかしこれだけのことをいうのには可なり苦労しました。この先どうなることやら。

他の隊員が色々お世話になっていますがよろしくお願い申上げます。

（吉沢宛、12・7、ロスにて）

第12回冬山登山技術講習会報告

指導研究委員会

▼期日　昭和四十六年十一月二十一日～二十三日
▼場所　富士山御庭小屋
▼講師　山崎安治（チーフリーダー）大森薫雄（ドクター）堀内章雄（マネジャー）中島寛、鹿野勝彦、小沢明夫、降旗孟、倉知敏、品川俊人、平野真市、梶正彦、松永敏郎。
▼受講者　戸張陞、中村純、味田村正行、斎藤清三郎、菊地裕治、土保勝彦、佐藤行彦、高橋広志、大村多聞、根岸久雄、桑原伸明、国光保雄、川口匡、加瀬定昭、小泉祥三、上野孝次、井上雅雄、伊藤富夫、西川寿、岩下博、塩久一、五十嵐澄絵、木村妙子、西山和子、琴坂元子、鈴木玲子、高橋よし子、高橋洋美。
▼本部　平井吉子、池内みよ子
▼行動記録

十一月十三日、パーティ編成と打合わせを兼ねて、富士山の登山史、凍死、凍傷について、および、冬山の装備などの机上講習を山崎、大森、松永の各講師が行なう。

十一月十九日、講師紹介、食糧分配および共同装備点検を行なう。

十一月二十日午後八時、予定通りルーム前を出発。昨年、一昨年とスバルライン凍結で夜行が変更になっているが、今年はスムーズに運んだ。十一時三十分御庭小屋到着、予定時間より三十分も早い到着である。全員で小屋の中の整備を行ない、明日に備えて直ちに就寝。

十一月二十一日、昨日夜行の入山なので、今日の起床は七時。小屋の近くには雪がないことは昨夜登って来る時にわかっていたが、朝小屋の外に出てみると雪は頂上のあたりに僅にみえるだけ、どうしようとおたがいに顔を見合わせた。雪を探し求めて九時小屋を出る。ガラ場をさまよい、白草流しから青滑り沢の六合目あたりに最初の雪をみつけ、キックステップによる登降の訓練を行なう、初心者には適度な堅さであるが、幅が三、四mと狭くトラバースの訓練なのかターンの訓練なのかわからなくなってしまう。その上四十名近くもいるので、すぐに他の班と衝突してしまいてんやわんんやである。

風もほとんどなく、日なたにいれば初冬の山にいることを忘れさせるような暖かさにとまどってしまう。

午後は広い場所を求めて、キックステップを訓練しながらさらに登り、アイゼンテクニックと滑落停止の訓練を行ない。四時終了。サンセットと競争で砂礫の斜面をかけおりる。

夕食後、ロープの結び方と操作の基本の講義を行なう。

十一月二十二日、昨日とうってかわって風が強く、寒さもきびしい。雲で頂上も、まわりの山もみえない。全員で訓練しながら頂上往復する予定であったが中止して、七時、昨日の場所まで登る。アイゼンテクニックと滑落停止の復習、隔時登攀の基礎の訓練を行なう。昼近くになって風もいくらか弱くなり、晴れ間もみえるようになったので、比較的アイゼンテクニックの確かな者十二名をピックアップして十二時三十分頂上へ向う。行動時間は三時までとしたが、結局は時間切れで、登頂せずに引返した。残りの者は同じ場所で、隔時登攀、制動確保、連続登攀の基礎訓練を続ける。終わり頃にはスムーズにロープが動くようになった。三時三十分終了、小屋に降る。頂上組も間もなく小屋に帰着。

十一月二十三日、七時の出発が少しおくれる、雪を使って炊事することのふなれのためである。五名の吉田大沢班をのぞいた残り全員は、昨日、一昨日の場所まで雪溪を探してはキックステップで登る。空は晴れているが陽が当る前なので雪面が堅く、一発でステップを決められる者が少ない。昨日までに習ったことの復習を十一時まで行ない、十二時小屋に帰着。

一時から二時まで全員で講習の総括を行なう。その後、小屋の中の跡片付けと戸閉まりをやって、三日間お世話になった小屋をあとにする。

三時チャーターバスでスバルライン中央高速道路経由、予定より三十分延着であったが、七時三十分ルーム前に全員無事に帰った。

この種の講習会はどこでも同じだと思うが、受講者は真面目過ぎる位でおとなしい。その裏返しでもないだろうが、質問や意見が出されることが少ない。意見といえば「非常に勉強になりました。今後の登山に生かしてゆきたい」という類の優等生らしいものばかりで、まことにさびしい。

少なくない費用を工面し、何日かの休暇を取って参加する人達であるから登山に対する熱意はあることは確かであろうが、その熱意を自分の山に結びつけるために、いま自分に出来ることは何かということがはっきりわかっていないように思われる。講習会に参加する以前にどういうことをしておかなければならないかが摑めておらず、ただ講習会に参加すれば解決すると考え熱意が講習会にだけ集中されていた感がある。

受講者の経験、レベルの違いは、ニードの多様性となってあらわれ、講師としてもこれを摑みきれず、理解の上でギャップがあるようにみえた。同じことをやっても受取り方が違い、大変勉強になったと満足している者がある反面不満を申し立てる者も出ていたことでも明らかである。一部には冬山登山技術講習に何をやるかはっきりしないで来ていた受講者もあったようである。机上講習の折などに出来るだけ受講者のニードをきき出すような方法を取る必要があることを感じる。

過去の記録を読んでみると、二回続けて参加している者はまれである。受講者の中にも「来る前冬富士はすごいといわれて参加したが、大したことはなかった」という発言があり、また一方講師は、ことあるごとに冬山の変化の激しさを強調していたことと考えあわせるならば、受講者に一回だけの冬富士経験に終らせず、同じ時期における冬山の違いを身をもって体験してもらう意味から来年も続けて参加するよう勧誘することが大切である。

（堀内章雄）

静岡支部の紅葉会に出席

十一月十三日～十四日、椹島

成瀬岩雄

まず、静岡支部の紅葉会も今年で十四回を重ねるに至ったということを御慶び申上げなければここに筆をとることは出来ない。特に、山本支部長の南アルプスにおけるあまねき足跡は勿論のことながら山本支部長を中心として支部員各位のなごやかな結び付きがなかったならば到底このように永く続く会合は得られないのではないかと感ぜられるのである。また、今回は静岡支部とは兄弟関係のように密接な間柄の井川山岳会の、会長であり、本会会員でもある滝浪さんを初め各位の献身的御協力もあずかって力あったこともここに御礼申上げなければならない。

「山あってこそよき仲間」「よき仲間あってこそ山は楽し」。いずれかは小生にも判然判らないが、兎に角、山懐に囲まれ、山を眺めて、誰ともなく百年の知己のごとく語り合い、錦織り成す静寂境に一日を過せたことにわが身の幸福を痛感するのであった。

翌、十四日は茶臼山行と鳥森山行の二班に分れてそれぞれ南アルプスの大観を楽しむはずであったが、あいにくの曇天に妨げられ、これだけは残念であった。しかし、小生にとっては、蜜柑の国、南国風景の静岡より遙々大井川の奥深き、悪沢岳を初め三千m級の連山を控えた椹島迄来てにわかに底冷する寒さを感じ、初めて南アルプスの山の深さが、北アルプスより遙かに大きいのに遅蒔ながら認識を新たに、痛感しただけでも今度の紅葉会は有難いものだった。

実はこの数日後、この強度の痛感押へ難き衝動に駆られ、南アルプスの主ともいうべき、会員牧野衛さんをそそのかして、山崎郁郎君と三人で笈ケ岳に登った時は幸い近来稀れに見る快晴に恵まれ、大無間から遙の地蔵、鳳凰までの全山を一望の中に修め得、ようやく心の落着きを取戻したというのがこの秋の小生の心境でもあったのだ。

満天、キラ星に輝く広河原に天幕を張り、山なす流木の焚火を囲み、久振りで「ああまだこんなところがあったのか……こんなにすき透った星が沢山あったのか……公害とは正に恐しきものなり……」と感動の二夜を過すことが出来たことを独り喜ぶと共に、南アルプスに対する小生の認識不足、足跡不足を呼び起して下さった静岡支部員の各位にここに更めて感謝申上げる次第である。

なお、山本支部長よりの御話しで、悪沢、赤石、聖、等の三千m級をすぐ前面に控えた大井川溪谷の「中ノ宿」にある東海パルプ株式会社所有の飯場が最近取壊しになるので、これを山岳会に譲り受けてはとの耳寄りの申出があったが、実現には資金面等に難点が

あるのではないかと一応、御答えはしたものの、東海バルプも山岳会の申出なら諒とするのではないかとの話もあったので早速、本会の理事会に諮る御約束だけはして帰った。

北アルプスにはすでに上高地山荘の話がどんどん進展しているし、北アルプスとは全く趣の変った南アルプスにも山岳会として気持のいい小舎をもう一つ持ちたいとは恐らく誰しも実現を望むに違いないと思って帰って来た。

なお、静岡支部創立二十周年記念会が十二月中旬に行われる由、ここに末筆ながら遙かに御祝言申上げる共に、末永く「紅葉会」の継続も御願する次第である。（一九七一・十二・一）

第十四回もみじ会報告

静岡県支部

第十四回もみじ会は、去る十一月第二土曜日の十三日に、大井川上流の椹島にて開催した。当日午前十時半静岡駅南口に集合し、乗用車七台に分乗し一路井川峠へ、当日朝刊には台風三五号接近のニュースも伝ていったが、天候は良く途中の横沢あたりの紅葉は盛りで、車窓の眺めは最上であった。

井川峠で小休止昼食をとり再び車にて井川を経て大井川上流の椹島へ、つい二三年前までは畑薙ダムより歩いて五～六時間かかった椹島の宿舎も、林道の開発でダムより一時間足らずで玄関横付であった。夜は恒例によりバーベキュウ、おでん、お汁粉による懇親会で、第一回より皆出席の松本氏を始め自己紹介を兼ねてのスピーチで、なごやかの中に盛会であった。

翌十四日は、上河内岳への登山組五名の他は、椹島より歩いて鳥森山（一五〇七〇m）へ登り、赤石岳、荒川岳、聖岳の眺望を満喫して一路静岡へ。

この椹島の宿舎は、まだ山の静けさを保っているが、車の乗入れが可能になった今日、時間的にも今までよりうんと短縮され、敬遠されがちであった南アルプスの主峰である赤石、聖、荒川岳への登山もここを基点として今後大いに開けるであろう。またそれだけ昔の山登りを楽しむ者にとっては淋しい限りである。

▽参加者　成瀬岩雄、麻生武治、佐藤佳年、野口末延、松本熊次郎、山崎金次郎、渡辺弥生、山形不二男、河村栄二、斎藤平七、沼倉寛二郎、牧野衛、山本朋三郎、川端信治、石間信夫、菅谷保夫、内藤正広、荻野恭一、水野公男、滝浪善一、鶴見敏彦、勝見幸雄、佐野敏郎、鈴木璋一、望月初雄、滝浪政志、渡野利道、入谷一重、中家海山、遠藤近、岩永安雄（31名）（岩永記）

図書委員会懇親会

恒例の図書交換即売会がおわって一息ついた十一月はじめ、図書委員会は紅葉の奥多摩で懇親会をもった。六日（土）夕、氷川の会場にはつぎの諸公が集まった。

小林義正、山崎安治、大橋晋、村石幸彦、武田満子、岩淵泰郎、荻野和夫、堀内章雄、横山厚夫、近藤信行、伊藤博夫、野上成勇、斎藤桂、川上忠義、松村泰良、吉田久兵衛、浦野勇逸、佐々木光子、池内みよ子、平井吉子

会場になった山荘は横山氏紹介の奥多摩山岳会のもので、駅にちかく多摩川の河原に突出たヒュッテだ。山荘からみる対岸は紅葉がちょうど盛りだった。

懇親の宴席は例により飲み歌いかつ踊る賑わいであったが、なぜかこの宵は御老体の明治調が若手を圧倒し、小林氏の先代左団次の声色や、吉田氏の「雪の進軍」はアンコールを繰りかえした。寡たけなわに及び諸公は歌いかつ踊る騒ぎとなったが、舞踊の素養のない私には、これはヨイトマケの動作に見えたのだった。かくてビール二ダース、日本酒六升、ウィスキー二本を呑みほし午前二時に宴が果てた。枕の下に聴く多摩の瀬音が快よかった。

七日朝はゆっくり起き、所用のある数名のほかは六石山にのぼる。出発まえに酒買いに走った方もあるくらいで山道の一行の前後は酒気ぷんぷんとして閉口する。朝からよい天気ではなかったが、三ノ木戸山を経、六石山の頂に立つ頃稜線は雪となった。霏々と降る雪の頂上で食事をし、ウォッカをまわしのみする。足下からはるかに車の音が聞える。奥多摩の山歩きらしい、しかし雪の奥多摩という珍らしい体験を一同はしたのだった。

六石山に着いたのが十三時、それから水根に十五時に着く。麓は薄陽が差していて紅葉が見事であった。排気ガスの臭いのする自動車道にたつと、東の谷あいに虹が浮びつい今さっきの雪は嘘みたいであった。

この懇親会は終始、横山氏のお世話になった。参会者一同はこのことを厚くお礼申しあげたい。

（荻野和夫）

日本山岳会の減亡を進言する

遊びが人間を文明化に向けた。そして文明人は山へ登ることの喜びを発見し、物質的な代償を求めないエネルギーの放散に価値を認めた。

われわれ集会委員は、日本山岳会の性格の太い支柱の一本として、創立当初には存在したはずの、山友達の語らいの場としてのサロンを持ち得るような方向づけの努力をしてきた。そこへ行けば心のなごむ岳人のつきあいがあり、たとえ山に行けないときでも、精神活動だけは進行していけるものでありたいと願ってきた。

これに加えて毎月テーマを全って、幅の広い岳人としての教養番組を提供することとし、話題の中心を作ってみたところ、外国遠征の実務というような、知っておくと直接的な実利のあるもののときは、登山団体の若手が押しよせるのに、山の歌の指導といった種類になるとまるっきり興味を示す人がやってこないで、演奏者として依頼した人たち以外にはだれもいないというありさま。

山へ行く人は歌が上手だとか好きだとか、よくいわれてきたが、私は少なくともこんなウソを二度といわせたくない。

問題は単なる歌に対する熱意ではなく、われわれのサロン確保に対する反応の低さもさることながら、文化的な面への追求意識の低調さだといいたい。

山へ登りさえすれば満足だというのは、高みへのぼるバカや煙と同じレベルであり、そこから何を体得できる素質があるか、より深く人間性を極めていくのに登山がどれほどの役割りを持ち得るのかという点まで考えなければたとえ日本山岳会員が世界じゅうの山へ陸続と出張したところで、内容はバカ並みであり、社会へはなんの価値あるものも還元されないことになる。

日本山岳会の構成員が何千人いようと、それは単なる煙の微粒子であって自然物を汚染するだけの存在だ。

文明人としての活動を停止した日本山岳会ならば、過去の歴史をよごさないためにも、なくなってしまったほうが先人への礼儀にかなうし、高いところへ登るだけで人間的向上心をなくした集団などは、存在しないほうがさっぱりしているし、社会も存在しないことに対してより高い評価を与えるだろう。

（西丸震哉）

志津倉山登山

成瀬岩雄

会津の志津倉山にはかねてから登ってみたいと念願久しきにわたっていたが、十月末、福島支部長の伊藤さんを初め、宮下町の志田正美さん、会津の山に詳しい西関良光さん、深谷金之助さんらにお供して本望を達することが出来たのは何より幸いであった。この山は博士山と対照的の位置にあり高度も僅か一三〇〇mそこそこの山ではあるが、只見線の宮下駅から最奥の村の八間方までバスもなく、ハイヤーに頼るほかないだけに訪れる人も少ないようで、それだけにようやく見分け得る登山路を皆さんの驥尾に付して山頂に達した約半日の行程は楽しいものだった。もちろん行き会う人もなく、まだ相当の茅葺屋根の年代距たる農家や、道ばたに見受けられる石仏を鑑賞しながら歩く平和な山村風景は会津ならではの静けさを保ち、期待にそぐわぬ旅であった。

大体山登りは登頂そのものも目的の一つではあるが、あわせてこれを取り囲む山村、民情などのひなびた桃源郷というような平和村を歩いてこそ旅の楽しさがあるものだと独り決めている小生にとっては、会津を愛し、好む理由の一つでもあるわけだ。その意味では博士山と志津倉山を結ぶルートなど最も好適な登山ではなかろうか。地元の志田さんらも将来の国体登山に採用してもらいたい御意嚮であった。帰りは曾遊の地沼沢沼に立ち寄り、折りからの快晴に頬が紅くなるほどの森林帯を独りトボトボ大栗山村という平和郷をへて水沼駅へ出て帰ったが、十日ほど前登った御神楽岳と共に今秋は日本の山独特の紅葉の素晴しさに魅せられしかもこれらがいずれも会津の山村の静けさとマッチしいい山旅だった。

図書紹介

ネパール・ヒマラヤ

ティルマン著
深田　久弥訳

ティルマン氏のこの著書は、ネパールの戦後開国の直後に行なわれた踏査行を集めたものである。したがって、このパイオニア・ワークはわが国でもその地域を狙っていた人たちの注目の的となって、いわば一エポックを現出したものであった。

今西錦司氏は、ティルマンがアルパインジャーナルに寄せた、この書の第二部にあたる紀行から、いち早く八〇〇〇m級の巨人峰マナスルを見出したし、深田さんはこの第一部にあたる部分から、ランタン、ジュガールのヒマラヤ山域へ出かける契機をつかんだのであった。

そのような因縁をもつこの本が、一九二年の初刊いらい、本年まで邦訳されずにいたのは、翻訳洪水のこの国としては、いささか不可思議なことでさえあったといえる。さすがに深田さんは、この本は自分が訳すべきものときめて、九分通りその訳を終えていられたということだが、惜しくも未完のまま残されてしまった。今回その残りの部分を吉沢一郎さんが訳し、諏訪多栄蔵さんが二段組み三〇ページにも及ぶティルマンその人と広汎な業績について、実に詳細な解説を加えた上で、「ヒマラヤ名著全集」の第四巻として刊行された。

原著の初刊された折には、まことに新鮮な魅力を持っていたのに、十九年の歳月を経て、ネパール・ヒマラヤはもはや未知の国ではなくなった。その点ティルマン氏には気の毒だが、この本のガイド・ブック的役割は過去のものとなってしまった。しかし、この本に接する人たちは、この著者の持つあくことない未知への探求心を到るところで感じるに違いない。本書の魅力は実はこのところにあるのではあるまいか。

本書の第一部は一九四九年のランタン・ヒマールを中心とする踏査行、第二部はアンナプルナ・ヒマール紀行、そしてエベレスト南面偵察への最初の試みなどをふくんでいる。いずれの場合も、ティルマン氏の心のなかには、地図の空白部に対する強い強い情熱が秘められていた。

新しい土地へ入ると、山頂を目指すよりも「探検という熱望には勝てないものである」と著者はいって、ジュガール、ランタンなどの山域を歩いても「国境線上の一つのコルへ登ることにしたのは、そこからチベットを見おろし、ことによったら所在のはっきりしないゴサインタンが突きとめられるがもしれないからであった」と述べている。

まさに生来の探検家というべきか。

この訳書では、多大の配慮がなされているのに、挿入地図のページが目次にも記されていないのは、いささか不便であった。

（島田　巽）

昭和四十六年九月、あかね書房発行三二八ページ、定価二、〇〇〇円。

白頭山天地　探行記録

城山正三著

本書は著者（JAC会員）が約三〇年前ソウル（京城）に居留当時（小磯総督時代）二回行なわれた日韓合同隊の白頭山探行記録である。

㈠、内容の要点

一、はしがき（探行経過と本書編集）

1、当時は戦時中で行政当局と登山計画との調和の苦労を推察する。

2、食糧燃料、物資、器材等の不足に悩む。

3、著者は戦災で二回探行記録の大部分を焼失し、疎開先に残在した資料と当時隊員中再逢の人士の協力により本書を編集した。

二、第一部　解説と探行記録

A、解説

1、伝説と山名

大陸側の伝説（布庫里雍順）と山名（長白山）、半島側の伝説（檀君）と山名（白頭山）

2、地理的概略

(1)、位置と範囲。亜細亜大陸東辺の主峰で北北東より南南西へ約一三〇〇K、南西は遼東半島の脊梁、中部は長白山脈主体

(2)、緯度と高度。北緯四二度、東経一二八度大正峰＝二七四三m、天池＝二二五七m（周一二Km、深三一二m）

(3)、地形。休火山で下部は森林地帯、上部は白亜台地（玄武岩）

(4)、河川。松花江＝大陸、鴨緑江＝黄海、図満江＝東海

3、歴史。大陸と半島の民族、政治の変遷

4、登山ルート（五本）。

(1)、大陸。松花江ルート、撫松、劉家瞠ルール、鴨緑江右岸ルート。

(2)、半島側。鴨緑江左岸ルート、図満江ルート

B、探行記録

隊編成（一次、二次共通）総務班、文化班、地理班、湖沼班、気象班、動物班、植物班、農林班、医学班、輸送班、報道班、警護班、トラック四台、牛馬四頭

1、第一次探行（全員七五人）

(1)、日程　一九四二、七、二三―八、七（一六日間）

(2)、ルート。ソウル（京城）→恵山鎮三池淵→神武城→無頭峰（支隊は間白山、小白山探行）→定界石→大正峰→天池（三泊）→往路→ソウル

2、第二次探行（全隊員八五人）

(1)、日程　一九四三、七、二四―八、四（一二日間）

(2)ルート。ソウル→茂山→茂峰→神武城→無頭峰→定界碑→大正峰→天池（三泊）→解奥山対岸→小林溝→二十道溝→泉水洞→ソウル

三、第二部　写真

山村風景、森林地帯、白亜台地帯、頂上、天池、岩壁等の景観、動物、植物、溪流、幕営、隊員等、合計六三枚の貴重な写真が解明に再現されている。

四、付録　台湾　千島　カムチャッカの山々。それぞれ写真と説明を簡略に収録。

五、あとがき

此の聖峰が国境紛争の地点にならず自然と人類の調和や、東方民族発祥の聖地として平和の象徴であるように著者と供に筆者も祈る。

㈡、読後所感（筆者）筆者は本書を数回返読中に深い感銘と共に著者に対し敬意を表する。

一、自然景観に感銘　登山基地→頂上→下山基地の過程が刻明に収録されている。

1、万物象。山村風景、産物、動物、植物、鉱物、地形、湖沼、樹海、天池の水彩、遠大な山稜、岩壁と山花、鶯ノ高翔、蝶の乱舞、風雨の洗礼等。

2、珍現象。山上の夕陽、十三夜の月、月光の虹、銀河の星雲、カシオペア座、北斗七星、北極星、東天の紅日、西天の残月、沈黙の雲海、音波の共鳴、気候の変化等。

二、著者の人格に感心

1、綿密な計画と統率力

第一次七五人　第二次八五人を連れ探行を完遂した。

2、徹底した科学精神

(1)、各専門家を励み其の任務を果さす

(2)、天池調査用筏材を山麓から運搬。

(3)、太鼓を叩き山彦の音波を確認。

■紀行と随想

わが越後の山

新潟県の登山界を担う岳人二十余名が、上中下越・佐渡と、それぞれホームグラウンドの山に抱く憧れと歓び。その心を魅了してやまない越後の山々の、四季の美しさ、楽しさ、そして厳しさを飽くなく追究する、爽やかに量感あふれた山の本。

A5版本文五一四頁
写真　四五頁
特製本　上製箱入
限定一五〇〇部出版
¥　二五〇〇円
〒　一七〇円

発行所　学生書房
951 新潟市営所通一番町
TEL（〇二五二）二二一九六七〇
振替　新潟　八四九

新潟県境
全縦走踏査登山の記録
越後6
山岳No. 6
越後の国境
A5版本文五二四頁
写真図版地図四五頁
¥一五〇〇〒一四〇
新潟県峡彩山岳会会報11号
（一月発行）頒価五〇〇円
〒一〇〇円

(4)、水温、水質、瀑布、温泉等を確認。
(5)、噴火時代遺物を確認。
3、自然愛好精神
(1)、天池に放流目的で鮒鯉の稚魚を輸送。
(2)、麓の苗木三十本を運び天池畔に移植。
(3)、シマリスや植物にも語り詩を吟む
(4)、牛馬にも感謝の礼をする。
(5)、天池景観を連想し眠れない。
4、登山哲学
(1)危険は山にあるのではなく登山者が体力装備注意で克服すべき要素だ。
(2)、山を征服するとは間違いで頂上に立つことは幸に登り得たことだ。
5、HUMANIST
(1)、隊員一人一人の一動一静を監察し常に愛情と注意を尽す。元老足立源一郎画伯の動静を何回も記されている。
(2)、雨漏り天幕の隊員に謝り即時交換
(3)、隊長である自分も荷物運搬を分担
(4)、常に感謝の意を表わす。
6、宗教心と平和主義
(1)、天池畔で慰霊平和祈願祭を実行。
(2)下山の際も天池に感謝と祈願の儀。
(3)、今後機会あれば白頭山再登を望む
三、著者の壮挙を慶ぶと共に筆者の願望。
1、当時は戦時中で種々と隘路はあったにせよ断行されたのは幸運で、今日では不可能な状勢である。
2、今後若し世界情勢が許されれば筆者も是非とも探行を実現したい。
四、本書は二回とも夏山探行であって冬山探行記がないのは残念だが、その反面三ルートの記録は貴重である。冬山紀行録は京大の遠征記録を参考にする。
五、本書は単なる探行記ではなく学術的価値も備えたので登山家探検家は勿論、歴史、地理、地形、火山、動物、湖沼、産業、政治等各専門分野にも貴重な文献であると思う。

(伊官炳)

昭和四十五年六月叢文社発行、一八一ページ、写真多数。三千円。

図書室便り

(昭和46・11)

新刊図書受入報告

実業之日本社寄贈
(1)東京大学ラテン・アメリカ縦継調査隊『中南米の光と影』昭和46
小学館寄贈
(1)白川義員作品集『ヒマラヤ』昭和46
茗溪堂寄贈
(1)日本山岳会編『山日記—47年版』昭和46
加藤泰安氏寄贈
(1)加藤泰安著『放浪のあしあと』昭和46
長崎大学学士山岳会寄贈
(1)長崎大学学士山岳会『KOH-E-BANDAKA 報告書』昭和46
深田久弥追悼委員会寄贈
(1)『深田久弥の追憶』昭和46
法政大学体育会ワンダーフォーゲル部寄贈
(1)『雲海—第十号—』
海野治良氏寄贈
(1)西岡一雄、海野治良、諏訪多栄蔵共著『登山技術と用具』昭和37

定期刊行物受入報告

〔部報・会報〕
(1)長崎山岳会『あしあと』(46—11)
(2)広島山の会『山毛欅林』No. 178～181 (46—7～10)
(3)兵庫県山岳連盟『兵庫山岳』No. 54 (46—11)
(4)国立公園協会『国立公園』No. 263, 264 (46—10,11)
(5)京都山岳会『京都山岳』No. 499(46—11)
(6)東京野歩路会『山嶺』No. 499 (46—11)
(7)日本自然保護協会『自然保護』No. 113 (46—10)
(8)低い山を歩く会『低山』No. 77 (46—11)
(6)日本登山協会『山と雪』No. 163(46—11)

〔雑誌〕
(1)『アルプ』No. 165,166(46—11,12)
(2)『岳人』別冊'72のスキー No. 2, No. 249 (46—12)
(3)『山と渓谷』No. 399 (46—12)
(4)『創文』No. 101 (46—10)

Journals Arrived in November 1971

1. "Alpinismus" 1971—8, 10.
2. "Die Alpen" Jahrg 47, Quartal 3.
3. "Die Alpen" No. 9 September 1971, No. 10 Oktober 1971.
4. "Deutscher Alpenverein Mitteilungen" Jahrg 23, Heft 5 Sep/Okt 1971.
5. "The Geographical Journal" V. 137 Part 3, September 1971.
6. "La Montagne et alpinsme" No. 83 Juin 1971.
7. "Österreichischer Alpenverein Mitteilungen" Jahrg 26 Heft 7/8 Juli-August 1971.
8. "Panorama of Slovakia" 1971-3.
9. "Rivista mensile" Anno 92 N. 8, Agosto 1971.
10. "U.I.A A" No. 46 Octobre1971.

図書委員会報告

十一月十日（水）午後七時(ルーム)
山崎・浦山・浦野・堀内・近藤・伊倉・野上・荻野・伊藤
一、図書交換即売会の収支決算
来場者に、出品物のリストを配るようにする。
二、『山岳』創刊号復刻の件
一月中に発行できるようにする。

トレッキング・・・・あなたのペースであなたの足で

ネパール・ヒマラヤ 18日間

'72　3月7日～3月24日
　　4月24日～5月12日
費用 ￥278,000

A. ゴザインクンド・ランタン・コース
B. アンナプルナ・ダウラギリ・コース
（上記費用にカトマンズ／ポカラ間往復航空運賃 $15.60 追加となります）
C. クンブ氷河とエベレストコース
（上記費用にカトマンズ／ルクラ間往復航空運賃 $120.00 追加となります）
D. アラカルト
あなたのプランで，トレッキングを

ネパール・ヒマラヤ 28日間

'72　3月18日～4月14日
費用 ￥199,000

インド・ヒマラヤ 28日間

'72　7月25日～8月21
費用 ￥226,000
ガルワール・コース
カシミール・コース（￥17,000 追加）
クル，マナリ・コース（￥23,500 追加）

中部ヒンドゥクシュ（アフガン）28日間

'72　7月25日～8月21日
費用 ￥297,500

●パンフレットをお送りします。御希望のコースをお知らせ下さい

協賛

芳野満彦東京事務所　東京都港区南青山 2—13—11 〒107 TEL 03 (402) 3053　三井航空サービス

三、「この一本展」の件
目録の原稿は15日ごろまでに近藤さんに書いてもらう。
四、図書室利用規程改正の件
次回の委員会にのばす。

十月二十三日に開催しました第四回図書交換即売会に際しまして、左記の図書を購入、また寄贈いただきましたので報告いたします。

寄贈図書　（　）内寄贈者名
1、冠松次郎著『立山群峰』昭和4（以上　中屋健一氏）
2、松本張治著『登山論』昭和44
3、文部省省登山研修所編『夏期登山研修会テキスト（試案）』昭和43『冬・春山登山研修会テキスト（試案）』昭和44（以上　山崎安治氏）
5、Le Roy Jeffors『The call of the Mountains』T. Fisher Unwin 1923.（以上　松本熊次郎氏）

講入図書
1、槇有恒編『マナスル登頂記』毎日新聞社　昭和31
2、日本山書の会『山書研究　12号』日本山書の会　昭和44
3、全日本スキー連盟『スキー・テキスト』朋文堂　昭和34
4、山崎直方著『西洋又南洋』古今書院　大正15
5、アンドレア・オッジョーニ著　横川文雄訳『わが触れし岩膚』白水社　昭和44
6、高須茂編『随筆　山日記』山雅房　昭和16
7、河田槇著『かひ　しなの』山と溪谷社　昭和21
8、京都大学山岳部『京大山岳部部報12号』
9、「地理学」別刷『北千島行』
10、『南洋』

会務報告

十二月理事評議員会

（13日午後6時半本会ルーム）

▽出席者　吉沢副会長、中屋、山崎藤井、熊谷、坂下、大森、村井、板倉、神原、中島、野上各理事、折井、金坂、織内評議員、今井監事

▽議事

・上高地山岳研究所の件　（山崎）
十二月十三日松本営林署から同意書が送付された。十二月九日安曇村教育委員会を窓口に文化庁長官あて特別天然記念物地域への建築許可願いを提出全書類は営林署の同意書でひと通りそろったが、今後は中央官庁との接渉が重要になるのでこの点を考慮したい。なお自転車振興会の交付金申請についてはいま一度中屋常務理事と三田会長が文部省体育局長にバックアップを依頼する。

・南アメ大井川椹島山荘の　（山崎）
静岡支部より椹島の東海パルプで使用している小屋を日本山岳会にゆずってもよいと東海パルプから申し出あり。費用約百万円をかければ立派な山荘に改築出来るむね要望があった。まだ本格的に具体化してはいないが、本会としも南アにも山小屋をという意味で検討しておきたい。この件了承。

・図書利用規定改正の件　（野上）
十二月の図書委員会で従来の規定を一部改定した。二月の会報山に全文を発表する。

・岩手支部設立の件（吉沢・山崎）
岩手県盛岡に支部設立の動きがあり支部規定に従い設立を検討したい。支部規定を盛岡に送付、また隣接の宮城、山形、秋田支部とも密接な連絡をとることが望ましい。正式の一件書類の提出を求め、さらに理事評議員会にはかって正式設立ということになる。この件了承。

・書評委員会の件　（藤井）
会報山への書評が大切なもので出なかったり遅れたりするので、書評委員会を設けたらと島田評議員から提案があった。織内評議員を委員長に至急人選を進めたい。この件了承。

▽報告

・リッペンレイテル氏への返事の件　（織内）
ソ連の登山家リッペンレイテル氏にモスクワで会ったが、JACへ高所医学の報告書を依頼したが返事がないとのこと、至急関係書類を送付してほしい。

・高所医学研究会の件　（大森）
韓国ソウルで一月二日から五日まで高所医学研究会が開かれるので中島道郎、長尾悌夫、住吉仙也の三氏に出席してもらう。

・年次晩餐会の件　（山崎）
出席は二六八名、無断欠席者十九名無断欠席者からは会費をもらうことにしてある。なお依託図書の売り上げは十万円余りあった。

ルーム日誌（46年11月）

4日（木）理事評議員会
5日（金）財務委員会
エベレスト編集委員会
9日（火）学生部
10日（水）図書委員会
エベレスト編集委員会
11日（木）稲門山岳会総会
12日（金）青年懇談会
13日（土）第十二回登山技術講習（机上）会
15日（月）第二七八回小集会「山の唄教室」講師　西丸震哉氏
婦人懇談会
16日（火）エベレスト編集委員会
17日（水）エベレスト編集委員会
19日（金）第十二回登山技術講習会準備会
20日（土）稲門山岳会
26日（金）常務理事会
青年懇談会
27日（土）学生部
29日（月）自然保護委員会
30日（火）海外連絡委員会
十一月中来室者　四七三名

会員異動

名誉会員推薦（46年11月）
四四四　田中　薫
六二八　岩永信雄
永年会員推薦（46年11月）
七九二　粟飯原健三

物故会員
七〇四三　高木邦夫　昭和四六・一〇・二〇逝去
一五五五　大島堅造　昭和四六・一一・二四逝去

会員名簿 1971 訂正
二〇頁上一三行六二五七住所　成瀬方を削る
三三頁下六行六五〇六〒　一九三
四三頁上三行二四五四電話（〇七六四）八二一一六六五
六九頁下九行六二〇八氏名　東京学芸大学山岳会
八八頁下二行二六一五氏名　福井正吉
九〇頁上九行四五二一氏名　藤田佳宏
九五頁上一三自一二二二〒　六六三

昭和46年度年次晩餐会出席者

荒巻広政、安彦六郎、青木易、阿達憲、青木英治、赤瀬暁、青木一夫、安藤昌宜、浅田治男、網蔵志朗、安間荘、今井雄二、今井喜美子、伊藤博夫、池田剛、岩瀬浩、今西錦司、板倉勝正、伊藤秀五郎、稲葉十四男、市川英脩、伊倉剛三、今井嘉道、池元善秋、浦野勇逸、宇田川久太郎、上野毛戸康男、遠藤登、大塚博美、奥井清、荻野和夫、小倉董子、小倉茂暉、大沢伊三郎、大森薫雄、折井健一、大野義徳、大野俊夫、岡田幸雄、荻野恭一、小島守夫、織内信彦、小花朋子、奥山章、小方全弘、笠原藤七、神原達、加藤泰安、金沢健、河村栄二、加治甚吾、金坂一郎、川北仁、神谷恭、雁部貞夫、勝田房治、亀井公、加納一郎、加藤昌晴、冠木伊右衛門、加藤哲郎、鎌田忠昭、片山全平、木下是雄、木村勝久、木村義昌、菊地文雄、菊池修身、工楽英司、黒石恒、国見利夫、久保田全、河野幾雄、児島勘次、後城謙二、後藤幹次、近藤信行、小西政継、小林義正、小山勝司、佐藤久一朗、酒井展弘、坂下心一、斎藤桂、佐々保雄、佐藤行彦、佐藤金一、沢村幸蔵、斎藤健治、佐藤達夫、佐藤テル、桜井信雄、沢田好文、佐藤佳年、栄源太郎、斎藤敏男、斎藤平七、坂本矩祥、進藤波男、清水春美、塩田良仲、城山正三、島尾久子、島尾智恵子、白川義員、島田巽、柴田厳太郎、鈴木一弘、鈴木昭、杉浦一、周布光兼、須田紀子、菅野時子、鈴木和信、瀬名貞利、関口周也、空昌昭、谷川菊雄、高遠宏、宅間清子、高橋照、高橋定昌、高田哲、武田満子、田村扇一、丹部節雄、田中元、田畑真一、竹田寛次、田中弘美、田村宏時、滝島清、鶴見敏彦、津田周二、鶴岡元之助、辻荘一、塚本茂樹、戸張陛、富田美知子、鳥居亮、富田英夫、外山定男、土橋進一、中屋健弐、中西農和、中野征紀、長沢佳熊、長尾悌夫、中島和宏、名須川浩、中田勇吉、中保、中島寛、梨羽時春、中名生正昭、成瀬岩雄、中村純二、中村太郎、名児耶達男、中井泉二、西堀栄三郎、西丸震哉、新島義昭、西野間幸雄、錦織保清、西脇千尋、野崎茂樹、野上成男、野口茂、野口秋人、野口末延、林和夫、原田幹市、早川義郎、浜野正男、浜野吉生、

羽田栄治、浜田一馬、春田俊郎、広島三郎、平沢亀一郎、平山武志、広羽清、広田靖典、広谷光一郎、日下田実、福井正吉、船越好文、二木信次、藤井運平、藤井信、藤島敏男、堀田弥一、堀内章雄、細川沙多子、ポトリーク・ポップルウェル、松沢憲夫、増田洋子、槇有恒、牧繁録、町田立穂、松長晴利、増田甲子七、丸田一夫、牧野衛、松田雄一、牧野内昭武、松永敏郎、前田浩、松島静吾、水野公男、宮崎英子、三田幸夫、宮森常雄、三浦巌、宮崎辰雄、宮下秀樹、村岡昭三、武藤晃、村田恭邦、室賀輝男、村井米子、村石幸彦、森宏子、望月達夫、諸岡一次、百瀬舜太郎、森田洋史、山本久子、山本朋三郎、山崎安治、矢田城太郎、山下久男、山口節子、山口滋嗣、安川茂雄、山口健児、柳宏子、山内高明、山本良三、山村正光、山里寿男、尹官炳、湯浅道男、横田明男、吉沢一郎、芳野満彦、吉武正子、横山厚夫、吉阪隆正、芳野赳夫、余野木脩、ミンクレア、渡辺正臣、渡辺公平、吉田久兵衛、小西毅、岡本洋一、木村清順、保泉利喜之助、篠塚貞雄、招待者深田志げ子、深田森太郎、孫慶錫、粟飯原健三、岩永信雄、田中薫（計二六八名）

第二七八回小集会　十一月十五日午後六時半から本会ルームで「山の唄教室」を開いた。講師の西丸震哉氏はコーラス団も準備されたが、参加者がきわめて少なく、講師をはじめコーラス団の諸氏にごめいわくをかけた。

青年懇談会発会式

青年部会が、青年懇談会として発足し、十二月十一日午後六時から本会ルームで発会式をあげた。宮下、中島理事を中心に、いわば学生部のOB会で今後の発展が期待される。なお翌十二日は広尾町のレストラン・ブリガンドの前の小公園でモチツキ大会を開き、家族づれで多数が参加し、にぎやかであった。

第二七九回小集会忘年会

十二月十五日午後六時半からルームで恒例の忘年会を開いた。各自プレゼントと無記名の手紙を持ち寄り、おすし、サンドウイッチ、ビール、ウイスキー（土曜会寄贈）で楽しい一夜をすごし、山口節子さんと佐々木光子さんの独唱にききほれた。

望月達夫さんをねぎらう集り

「山岳」の編集にたずさわって二十年におよぶ望月達夫氏をねぎらい、十二月十四日午後六時から霞ケ関三井クラブで有志が集まり、記念に佐藤久一朗氏作のアマターの靴を模した青銅製の花びんを贈呈した。

あとがき　あけましてお目出とうございます。この冬はどうおすごしでしたか。小生はある本屋にたのまれてボニントンの「アンナプルナ南壁」と取り組み、字引きと頸っ引きでウンウンいっております。大変荒っぽい英語で多分テーブに吹きこんだものを原稿にしたのかも知れません。本年もまたどんどん御寄稿下さい。（山崎）

昭和四十七年一月十日発行
東京都千代田区神田錦町
三―二三　向井ビル
発行所　社団法人　日本山岳会
編集代表　山崎安治
（293）七四四一
振替口座東京四八二九番
東京都港区赤坂一丁目三番六号
印刷所　株式会社　技報堂

茗渓堂＝山の本

東京都千代田区神田駿河台2の1・Tel(291)9442振替東京24723

森林・草原・氷河
加藤泰安著
〈A5判482頁〉定価1,500円

すこし昔の話
初見一雄著
〈四六判400頁〉定価1,200円

遠い山・近い山
望月達夫著
〈B6判334頁〉定価960円

山の古典と共に
大島堅造著
〈四六判280頁〉定価1,500円

雪山・藪山
川崎精雄著
〈A5変型判340頁〉定価1,200円

雪原の足あと
坂本直行著
〈B5判206頁〉定価2,800円

約40年のキャリアをもつ編集と内容。
赤いカバーでおなじみの……

山日記1972年版
日本山岳会編
〈A6判368頁〉定価750円

山　岳
日本山岳会編
〈A5判〉
総索引 1,000円
65年 2,000円
64年 2,000円
63年 2,200円
62年 2,000円
61年 1,800円

国立公園カレンダー
国立公園協会編
〈A5判リング綴り〉定価960円

屋久島・美しい豊かな自然
赤星　昌編
〈B6判202頁〉定価480円

山で唄う歌1集・2集
戸野昭・朝倉宏編
〈A6判126頁〉1集240円・2集280円

日高山脈
北大山の会編
〈菊判362判頁〉定価2,200円

山に忘れたパイプ
藤島敏男著
〈菊判584頁〉定価2,500円

日本の山旅
足立源一郎スケッチ帖
〈A変型208頁〉定価3,600円

アンナプルナ日記
京都大学学士山岳会編
〈A12取変型判170頁〉定価1,200円

登頂ゴジュンバ・カン
高橋　進編
〈A5判350頁〉定価900円

キンヤンキッシュ1965
東京大学カラコルム遠征隊編
〈B5変型判220頁〉定価3,000円

登山・スキー用具専門店

山の店

大阪市北区梅ケ枝町101
TEL. 06(362)5736

●買い易い
山の店

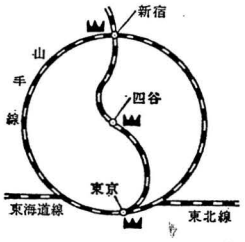
●北へ来たら
山の店

●フレッシュな
山の店

山とスキーの専門店

片桐

東京都文京区湯島3丁目38－9
片桐盛之助
電話 東京(831) 1794・6680番



四谷店　東京都新宿区三栄町三番地
TEL (351) 7432・1912
八重洲口店　東京都中央区八重洲二の五
TEL (271) 1560・8575
新宿店　新宿ステーションビル四階
サービスショップ
TEL (352) 6564
日本信販加盟店

山友社たかはし

登山とスキー具

イワタ

東京都中央区日本橋通2－1
PHON; 271—7686・1718

登山用具の専門店

好日山荘

東京店・中央区銀座2－4－5 (561)3600・(567)9031
東京店・中央区銀座2－4－4 (561)0966 スキー店
大阪店・北区曽根崎上一丁目47 (364) 0933 (代)
福岡店・須崎町1－4 (28) 3440